

NPOとしての関西学院の価値

岡 本 仁 宏

「関西学院は、NPOである」。こう学生に言うと、「嘘だろう」と言わんばかりの意外な表情が返ってくる。日本では、NPOというと小さなボランティア団体を想起しやすい。しかし、非営利非政府である学校法人は、明らかにNPOである。

ところで、NPOの価値は何によって測られるか。一般に、企業の場合には、その評価は株価によって表現される。企業価値は、どれだけ収益を現在、また将来生むかによって測られる。しかし、NPOは営利追求を行わず、株価も存在しない。

学生たちは、「関学は高い学費を取って儲けているじゃないか」と言う。それに対しては、そのお金は、「寄附行為」、つまり初めにこの学校を建てるためにお金を寄付した人々の思い＝ミッションを実現するための約束に従って使われるのであって、「余っても利益を株主や理事が山分けにするわけではない」。そして、関学を含めて、一般にNPOの評価は、どれだけミッションを達成したか、という視点でなされると説明するのが、NPO論の常識である。

さて、近年学部が増え関学の規模が拡大してきた。スポーツでの活躍、偏差値の向上、受験者の増大、就職率のよさ、全てうれしい。とはいえ、これらすべては、ミッションの達成という基準から評価されるべきである。

こういって、一方では、「慈善事業はやってられない」、他方では、「抽象的な精神訓話による評価なんてどうにでもなる」、という二つの反論が出される。しかし、例えば、ノーベル賞をもらった国境なき医師団は19カ国に支部を持ち800億円以上の財務規模を持つ。抽象的な命題を具体的な達成指標として表現することが、NPO経営の基本である。ミッションに基づく事業の社会的意義をきちんと説明できるNPOは、事業資金を集める力もすぐれている。ミッションが、単に抽象的で自己満足的なお題目に止まっていれば、事業経営としても成功しない。

青年ランパスが遠い異郷の地、神戸に降り立った時の強い思いを、どのように受け止め生かすことができるか、これが関学の価値を計る究極の基準である。能力を伸ばす機会が得られない人々は、日本にも世界にもたくさんいる。そして、抑圧のもとで自由な真理追究を許されない人々もたくさんいる。関学はNPOとしてどのような評価を得るのであろうか。

(法学部教授・学部長)